

## ベルクソンのファイヒテ観

—ポスト・カントの哲学のあるべき姿をめぐる—

村上 龍

## 序

フランスの哲学者アンリ・ベルクソン（一八五九—一九四一年）とドイツ観念論の関係といえ、従来、シエリングとの類似に注目することが多かった<sup>(1)</sup>。だが、近年出版されたファイヒテに関する講義録をみると、カントを意識しつつ自身の哲学を構築したベルクソンが、その過程でむしろファイヒテと興味深い出会いかたをしているのが分かる。著作中では第三主著『創造的進化』（一九〇七年）で通りすがりに幾度か言及があるばかりであるファイヒテの、ベルクソン哲学の形成にとつての隠れた重要性に、本稿は光を当てる。

以下、まず第一節において上述の講義録「ファイヒテ講義」（一八九八年）を検討し、そこで描きだされるファイヒテ像が、ベルクソンにとつて哲学史上、とりわけカントとの関わりでもつ意義を見定める。第二節では、ベルクソン自身がカントに対し構えるスタンスを、「ファイヒテ講義」以後に刊行された最初の主著であり、わずかなりともファイヒテへの言及がみられる唯一

の著作でもある『創造的進化』に即して確認する。一連の考察を通じ、ポスト・カントの哲学はいかにあるべきかという問題を関心（自らの解釈する限りの）ファイヒテと共有するベルクソンが、自身の哲学の構築に際し、ある面ではファイヒテに近づきながらも、これとは対照的な道を選んだことを明らかにしたい。

## 一 ベルクソンのファイヒテ解釈

——カント哲学の読み替えによる知識学「ファイヒテ講義」は大筋において、『人間の使命』（一八〇〇年）を概説する講義の記録だが、ここからはファイヒテ哲学全体についてのベルクソンの理解を、更には、彼によるファイヒテの哲学史上の位置づけをも窺い知ることができる。

ベルクソンは、「必然性の観点」を示す『人間の使命』第一巻を「スピノザ主義」という言葉で総括した後（p. 168）、『全知識学の基礎』の成果「そのものとみなしうる第二巻、および

「知識学」の発展に他ならぬ第三卷の解説に先だち(512c)、知識学の概要を素描している。まずはこの箇所を検討する。

——— 知識学の出発点としての純粹統覚

バルクソンは最初に、フィヒテが『知識学への第二序論』(二七九七年)でカントの純粹統覚に言及したくんだりを取りあげる。純粹統覚において、「いかなる意識ないし認識をも条件づける」「自我の純粹意識の觀念」が「知的直観」により与えられているとみたフィヒテは、「カントに従うなら」「純粹自我から」「意識(＝認識)の全体の体系的演繹」を行わねばならないと考えた(512c)。だがバルクソンによれば、この理解は根本的な誤解に基づいている。純粹統覚が全ての認識を条件づけるといつても、それはただ、あらゆる意識に伴うという意味においてのことだった。そこに「認識全体の演繹」の出発点となるべき「純粹自我」を読みとるのは、ともかく「認識の全面的演繹」をなさねばならぬという、カントとは無縁な独自の「要請」に歪められた誤読である(512c)。要するにフィヒテの哲学は、カント的な純粹統覚を独自に読み替えることでその着想を得た。バルクソンはそう教えるのである。

——— 知識学の概要

では、そうした着想に導かれた知識学の内実はいかなるものか。バルクソンはこの点の解説の導入として、『新しい哲学の

固有な特徴についての一般大衆に対する日のごとく明快な報告』(二八〇一年)の第一講を参照する。

バルクソンが強調するのは、フィヒテが、何かを「自己に外的なものとして」知覚しまた想起するのは「自我を忘却し」「自己から気を逸らす (se distraire de soi)」ためとし、これら具体的経験のうちに、主観による「自己の忘却」を見てとる点である(513c)。フィヒテは他方で、具体的経験から「身を引き離す能力」、「この能力を思考する能力」、「この思考を思考する能力」を順次たどり、「反省的な生の全能力」を引きだしてもいる。だがバルクソンによれば、「上昇の運動において自我が自らを再発見する」のも、まずは「下降において自我が自己を忘却する」がゆえなのである(513c)。このことから彼は、「純粹自我」が自己の「忘却」ないし自己からの逸脱の諸段階を通じて、次第に「経験の質料性」「物質性」に「下降」する構図を読みとり、それを知識学の凝縮的なイメージとして提示する(514c)。そしてこの構図に基づいて、バルクソンは結局、純粹自我から認識の全体を演繹する知識学の所説を、「統覚の総合的統一が徐々に感性の多様そのものを創りだすに至る」と考える「体系」として紹介する(F. 182)。

——— 神への遡行

こうして知識学の概要を示した後、バルクソンは知識学の所説そのものとみなしうる『人間の使命』第二卷を要約し、次い

で、彼によれば知識学の発展に他ならない第三巻へ向かう。第三巻では、我々の表象する世界は我々の「義務の対象、領域」として論じられ(『F 196』)、更にはこの義務が、すなわち自由の自由なる決定を命ずる良心への服従の義務が、「無限なる意志」すなわち「神」によって根拠づけられる(『F 200』)。これは、「フィヒテが第二の哲学に移行した」と思わせるに十分である(『F 200』)。しかし、ベルクソンのみるところでは、第三巻への展開の芽は、第二巻つまりは知識学にあらかじめ含まれていた。

それを証拠だてるべく、彼は『知識学への第二序論』を再度参照し、結語における二つの自我の区別に注目する。フィヒテは知識学の「出発点」で、「知的直観の対象としての自我」すなわち純粹自我をめぐり、「自我の活動の方向を規定」した。ところがその後、彼は直ちに「理念としての自我」を目標として立て、自我の活動の方向に「道徳的自由」の「自己実現」の性格を与える(『F 201』)。ベルクソンの考えでは、「弁証法的原理」から「道徳的原理」へのこうした移行のうちには、既に「人間の使命」第三巻の萌芽がはらまれている。自我の活動を根拠づける「人間の使命」の神は、『知識学への第二序論』で道徳的努力の理想的目標とされた、「理念としての自我」の発展形に

他ならなく (*ibid.*)。

以上のように、講義録に従えば、カント的な純粹統覚を独自に読み替え、そこにおいて純粹自我が知的直観によって与えられていると考えたフィヒテは、これに想を得て、純粹自我が感

性的多様を創りだす過程をたどった。しかもその際、彼はこの自我の活動に道徳的性格をまとわせ、やがて神と呼び改めることになろう理想的目標をめざす、自己実現の運動としてこれを位置づけたのである。

#### 一— フィヒテの哲学史上の意義

このようなフィヒテの哲学は、歴史上いかなる意義を有するものか。ベルクソンは講義冒頭で、カントの後を襲ったフィヒテの哲学史上の位置を略述している。

一般にも言われるように、「カントが確立せんとしたのは、自我も完全な存在も、直観としては与えられないということである」が(『F 196』)、それはいかにしてか。

神とは何か。実在のおよび可能的な全ての現象の全体、判断力が自己規定する全ての判断の全体である。判断する機能は、我思ウにとつて本質的である。諸々の述語は実在の中から選ばれる。諸述語の総体とは、実在性の総体 (*omnino realitas*) すなわち神の観念である。実在する自我とはいえば、これは何に還元されるだろうか。直観の多様に適用された我思ウは、諸々の主観と客観を創りだす。表象や判断に一定の共通な論理的主語を採らせるような表象および判断の体系、を我々が取るならば、それらはその根底に、一つの形而上学的な主観の観念を示唆する傾向をもつ。個体的な自我とは、我思ウが自らの適用される質料を経由するこ

とで、屈折したものである。純粹理性の自我および神は、カントの考えでは、我思ウの総合的活動の二つの極限的な位置にすぎない。我思ウを置いてみよ。それに、質料として感性的現実を与えてみよ。弁証法的運動が生まれ、それが一方の終端に神を、他方に自我をもつだろう (F. 155)。

やや雑然とした記述だが、問題とされているのは、超越論的理念としての自我ならびに神である。注目すべきは次の点である。ベルクソンは、「我思ウ」すなわち純粹統覚と「質料」たる「感性的現実」との「弁証法的運動」という理論上の枠組によつてこそ、自我と神を「極限的な位置」に置くことが可能になると言う。つまり彼の考えでは、カントが自我および神の、すなわち物自体の認識不可能性を確立したのは、認識をめぐつて「統覚の総合的統一」と「直観の多様」との「妥協」を語ることによつて、別言すれば、「媒介的な諸形式、すなわち諸カテゴリー、空間および時間」を介在させながら「この形式とこの質料」とを隔て、「区分」することによつてであつた (*ibid.*)。

先述のように、ベルクソンによれば、フィヒテはカント的な純粹統覚に想を得て、純粹自我が感性的多様を生む過程をたどつた。しかも、彼はその自我の活動に、後年神と呼び改めることにならう理想的目標をめざす、道徳的性格を与えていた。とすれば、カントが「統覚」と「直観」の多様との、すなわち

認識の形式と質料との区分を通じ、物自体の認識不可能性を主張した後で、フィヒテはカント哲学を読み替えつつ、「形式」が「質料」を「創造」と論じて両者の区分を解消し、以つて物自体の認識可能性を回復せんとしたのである (F. 156)。

### 一三 知識学に対する評価

#### 一三— プロティノスとの親近性

こうしたフィヒテの試みは、肯定的に評価されるのか、否定的に評価されるのか。その点を探るうえで手がかりとなるのは、「フィヒテ講義」末尾の一節である。ベルクソンはそこで、「カント哲学の解釈」を経て「M」すなわち純粹自我から出発する降りの運動の「演繹」を構想したことを、まずはフィヒテの「独自性」とする。しかし彼は、フィヒテが「時間を捨象」したために、降りの裏面に「M」への「回帰」を、更には、おそらく神を指すものであろう「Mの手前」への「回帰」を想定するに及んだと言い、この点で「フィヒテの哲学は独自性を減じ」、「アレクサンドリア学派」に近づくと断ずる (202)。

アレクサンドリア学派すなわち新プラトン主義に言及するとき、ベルクソンの念頭にあるのは、常にプロティノスである。そこで、ベルクソンによる知識学の評価を見定めるにあたっては、彼のプロティノス観を確認することが有益である。

### 一—三—二 プロティノスの人格理論の誤り

ベルクソンは、エジンバラ大学での連続講演「人格」について（一九一四年）のなかで、プロティノスにまともな言及をなしている。彼のみるどころでは、プロティノスの哲学は「第一に人格の理論である」(p. 1054)。というのも、プロティノスは思索の歩みの端緒で、人格が「一方で一」、他方で「多」であるのはいかにしてかという問題に直面したとみられるからである (p. 1053)。ベルクソンによれば、プロティノスはこの問題を、人格が本来の「精神的」「本性」において「不可分」の「統一」でありながら、「衰弱」ないし「自己からの逸脱 (excursion beyond itself)」によって「質料化」し、「無制限な多性」に「分割」されると考えることで解決した (ibid.)。ただしプロティノスはその際、不可分の統一から無制限な多性への衰弱もしくは逸脱を、時間的展開において「巻物を解く」イメージのもとに考えた。そのため、彼は二つの人格を区分する際、「権利上、我々は時間の外にあるが、事実上は時間において展開する」と考えるに至った (p. 1056)。

端緒で直面した問題に解決を与えるや、プロティノスは本来的人格の上に更なる統一を、そして衰弱した人格の下に一層の分割を求めた。ベルクソンによれば、「神、叙智的なもの、身体を伴った魂という三つの基体の理論」、および「一者」からの「流出」と「回帰」の理論は、その帰結である (p. 1057)。

このように、プロティノス哲学全体の礎は彼の人格理論に、

すなわち人格の統一を時間の外に置き、質料化し多に分割された人格の衰弱態に時間を割りあてる人格理論にある。だがここには、「内的時間をばらばらの諸瞬間に粉碎されたものとみなす、決定的な誤謬が果食う」(p. 1056)。反対に、ベルクソン自身は「不可分の持続」という「…」考えに訴えつつ (p. 1056)、プロティノスの「視点を反転」せんとする (p. 1053)。彼はまず、時間のうちにこそ人格の本来的統一を見出すべく、「意識の現実存在の全体にわたって継ぎ目がない」ような「不可分」な「変化」の「連続」に注目し (p. 1062)、そこにみられる、「過去の全体を取りあつめながら未来を創造する、連続的な前方への運動」を、「人格の本質的な本性」とする (p. 1063)。そして彼は、このように不可分な持続の「人為的」な断片のほかに、むしろ「不動性」や「休止」を認める (p. 1061)。つまり、プロティノスとは対照的に、出発点としての統一に時間を割りあて、その分割された諸断片を時間の外に置くのである。

以上のように、ベルクソンによればプロティノスは、不可分な持続であるはずの時間を諸瞬間に粉碎した結果、誤った人格理論に陥り、その延長線上で三つの基体、および一者からの流出と回帰の体系に行きついた。これを踏まえたいうで先の「フィヒテ講義」の記述に立ち戻れば、その意味は理解される。要するにベルクソンは、純粹自我が自己忘却ないし自己からの逸脱を通じて質料の多様を生む過程をたどるフィヒテにも、時間の外なる統一人格が衰弱ないし逸脱を通じ、質料的

多性に分割されて時間のうちで展開すると考えるプロティノスと、同じ誤謬を認めたのだろう。フィヒテもまた、出発点の純粹自我を時間の外に置いたがために、結局は自我への回帰や、更には神への回帰を語ってプロティノスと道行きを同じくしたわけである。とすれば、カントの後を襲ったフィヒテの試みも、ベルクソンにとつては否定的な評価の対象でしかなかったろう。<sup>(12)</sup>

## 二 カント哲学の読み替えによるベルクソンの認識論

ところでベルクソン自身も、自我や神という物自体の認識可能性の回復を、喫緊の哲学的課題と考えていた。ただしそのためには、不可分な持続という、フィヒテには欠けていた視点にたつ必要があるのだが、その際フィヒテとは裏腹に、カントによる認識の形式と質料の区分が、ベルクソンにとつて重要な意味を帯びる。その点を、『創造的進化』に即してみる。

### 二―一 ベルクソンの認識論的枠組

悟性ないし知性という人間の認識能力を、「行動の必要に相関的なものと考え」るベルクソンは、その本性を行動から「演繹」しようとする(頁624)。「行動」する、すなわち事物に「働きかけ」てこれを利用する際には、「実在する諸物体」の「輪

郭」などお構いなしに、「好きなようにそれを解体し再構成することが必要となろう(頁628)。それゆえ、「行動」に資すべき認識能力としての「人間の知性」は、そうした「可能な解体や再構築」の作業場となる、「等質、空虚で無差別な空間」に支えを求めるはずだとベルクソンは考える(頁624)。こうして、空間を準拠枠とする知性の本性が演繹される。

とはいえ、かかる本性の知性により導かれる行動は、なぜ成功するのか。ベルクソンによれば、それは、知性の眼差しに依る素地が事物の側にもあるからである。この点を明らかにすべく、彼は空間ならぬ内的持続としての時間に目を転じる。

我々にとつて「最も内的に感じられる地点」には、「過去が常に前進しながら絶対的に新しい現在によつて絶えず肥つてゆく持続」がある(頁625)。だが、「自らの緊張を緩め、過去の可能な限り大きな部分を現在に推し入れる努力を中断」すると(頁625)、さきほどまで「ひとつの切っ先に集中していた」「我々の人格の全体」が「分散」し、「我々の過去は「……相互に外在化する幾千もの記憶に解体する」だろう(頁626)。さてベルクソンは、緊張せる内的持続のこのような弛緩の運動を「更に進めた」先に、「外的事象たる物質を想定する。そして彼は、空間を、「この運動が到達するであろう終端」に予想される理想的極限とみなす(頁669-667)。とすれば、空間を準拠枠とする知性が事物に向ける「眼差し」は、なるほど事物自身の節分けに忠実でないとしても、事物の「物質性」「質料性」をいっそう強

め」るのにすぎない(頁 66)。事物の側にも知性の眼差しに応じる素地がある、というのはこうした意味においてであり、だからこそ、知性に導かれる行動は一定の成功を約束されるのである。

このように、知性の準拠枠を空間に求めるベルクソンは、その空間を、内的持続の弛緩に他ならぬ自らの運動において物質が向かう、理想的極限とする。こうして彼は、持続の緊張と弛緩のシエマによって時間と空間とを独自に関係づけながら、知性を空間の側に引き寄せる。そしてそのうえで、知性とは対照的な、持続に即した認識能力として「直観」を立てるのである(E: 645-646, 721-722, 784-785)。

## 二二二 カント的認識論との関係

かかる議論は、カントとはおよそ縁遠いようにも映る。しかしながら、ベルクソンは自らの認識論的枠組を、修正されたカント的認識論と位置づけている。

カントは「認識の質料と形式」を「区分」し、質料に「知性」外の、すなわち形式の外なる「起源」を「与えた」。そのとき彼は、「直観の高次の努力によって認識の知性」外の質料に身を据え、「新しい哲学」に身を投じてもよかつたらう(E: 79)。だが、カントは「その方向に乗りださなかつた」(頁 79)。その理由は、ベルクソンによれば、「物理から生命へ、生命から心理へと進むに従つて」科学が「徐々に客観性を失う」ことを、

見逃したためである。「経験」の複数性に思い至らなかつたカントは、結果、「知性」あるいは悟性を「感覚的」ないし「知性」以下の「直観」に覆いかぶせる理論上の枠組を、経験全般にわたり構想した(頁 798-799)。これに対し、科学の客観性にはらつきを認めるベルクソンは、「経験」が、「一方は知性の方向に合致し、他方はその反対」という「相反する」「二つの方向」をとると考える。そのため彼は、「知性」以下の「直観」に加えて「超」知性的な「直観」をも想定できた(頁 799)。先の議論と関連づけるなら、知性の方向に合致した経験、あるいは知性以下の直観とは空間的直観を意味し、その反対の経験、もしくは超知性的な直観が持続的直観にあたると言える。

つまり、持続の緊張と弛緩のシエマのもとで、弛緩の終端に位置づく空間へ知性を引き寄せることにより、一方で知性以下ないし空間的な直観を知性に重ねあわせながら、他方で超知性的もしくは持続的な直観の可能性を確保しようというのである。認識の形式と質料を区分し、後者に知性」外の起源を与えるカントの認識論は、偉大な前進だった。たしかにベルクソンは、空間的直観と知性とを重ねあわせ、一面では形式と質料の区分を再び解消している。しかし、そのことを通じ逆説的にも、高次の質料とも呼ぶべき持続に対応する直観が、知性とは対照的な能力として立てられる。カント的認識論のかかる独自の修正を経て、ベルクソンは、持続に即した高次の直観を通じ

て知性<sup>13</sup>外の質料すなわち物自体に迫る、新しい哲学を立ちあげようとしたのである。

### 結語

「フィヒテ講義」に従えば、カントは認識の形式と質料を隔て、区分することを通じ、物自体の認識不可能性を主張した。

その後を襲ったフィヒテは、カント哲学を読み替えつつ、形式が質料を創造すると論じて両者の隔たりを解消し、以って物自体を再び認識の領野に引き戻そうとする。しかしながら持続の観点の欠如ゆえに、知的直観によって自由な自我に迫り、更にはその根拠としての神にまで遡る彼の哲学は、ベルクソンにとって否定的な評価の対象でしかなかったとみられる。

物自体の認識可能性を真に回復するには持続の観点にたたねばならないが、「フィヒテ講義」の後に刊行された名著『創造的進化』によれば、実は、それは他ならぬカント的認識論の修正を経て可能となる。認識の形式と質料を区分したカントは、まさにそのことによって図らずも、持続に即した直観を通じ物自体に迫る、新しい哲学に道を開いていたからである。

してみるとベルクソンは、カント哲学の批判的受容を経て物自体の認識可能性を回復しようとする、その意味でポスト・カント的な関心を（自らが解釈する限りの）フィヒテと共有しながら、「フィヒテ講義」の数年後に、カンティスムに対し、

フィヒテとはちょうど対照的に応答してみせたのである。カントが形式と質料の区分を通じて認識の相対性を確立したのなら、その区分を解消すればよいと考えたのが、（ベルクソンの解釈する限りの）フィヒテだった。しかしそれも、言うなれば対症療法でしかない。抜本的な解決のためには持続の観点が不可欠だが、その際フィヒテとは裏腹に、むしろ形式と質料の区分を、カント自身の意図とは異なつたしかたで活用する必要があった。

とはいえ、ベルクソンのフィヒテとの近しさも見逃してはなるまい。内的持続としての時間を緊張の極に位置づけたベルクソンは、物質をその弛緩とみなす。ベルクソンの認識論的枠組を支えるこのシエマは、時間の外なる純粹自我から質料の多様を引きだす、フィヒテ的構図の反転ともみられる。出発点に時間を割りあてるか否かの相違をのぞけば、実のところ、両者は思いのほか似通っている。とすればベルクソンは、後にプロティノスについて語るようになるごとく、「フィヒテ講義」の数年後に、まさにフィヒテの視点を反転することにより、カント的認識論のくだんの独自の修正にたどりついたと言える。フィヒテ的構図を反転したシエマのもとで、時間の外なる純粹自我に対応するフィヒテ流の知的直観が、物自体に真に迫りうる、持続に即したベルクソンの直観に鑄なおされたのである。

以上みたように、ベルクソンの「フィヒテ講義」からは、ポスト・カントの哲学はいかにあるべきかという問題関心に方向

づけられたフィヒテ観が読みとれる。フィヒテが踏みだし損ねた一步を、ベルクソンは一世紀の後に、フィヒテの視点を反映しながら、改めて踏みだしたのである。<sup>(1)</sup>

## 凡例

ベルクソンからの引用は、以下の略号と共に頁数を（ ）内に記す。引用文中の強調は原著者「」は引用者の補足である。

F. … 「Fichte, die Bestimmung des Menschen,」 Henri Bergson, Octave Hamelin, *Fichte*, cours inédits, Philippe Soulez, Fernand Turlot (éd.), Presses Universitaires de Strasbourg, 1988, pp. 145-203.

E. … *L'évolution créatrice*, 1907, *Oeuvres* (1959), édition du centenaire, P. U. F., 1991, pp. 487-809.

P. … 「Onze conférences sur «la personnalité»,」 *Mélanges*, André Robinet (éd.), P. U. F., 1972, pp. 1051-1071.

## 註

- (1) Cf. Vladimir Jankélévitch, "Deux philosophes de la vie: Bergson, Guyau (1924),” *Premières et dernières pages*, Seuil, 1994, pp. 13-62. Ernst Cassirer, *Die Philosophie der Symbolischen Formen*, Bd. III, *Phänomenologie der Erkenntnis*, Bruno Cassirer Verlag, 1929. Gilles Deleuze, "La conception de la différence chez Bergson, ” *Les études bergsonniennes IV*, 1956, pp. 77-112. Maurice Merleau-Ponty, *La nature*, notes et cours, Dominique Séglard (éd.), Seuil, 1994.
- (2) 後でみるように「これらなりげない言及も、「フィヒテ講義」の知見をたしかに踏まえている。註(8)(10)(12)参照。

- (3) 管見の限り、ベルクソンとフィヒテの関係を論じた先行研究には以下の三点があり、いずれも本講義録の検討に多く紙幅を割いている。なかでも、ベルクソンの新プラトン主義的なフィヒテ解釈に注目するゴタールの論考は、その点で本稿と関心を共有する。荒木秀夫「ベルクソンの『フィヒテ講義』をめぐる」、『フィヒテ研究』、四号、一九九六年、三八—五三頁。Jean-Louis Vieillard-Bruon, "Bergson et Fichte," Yves Radtzzani (éd.), *Fichte et la France I*, Beauchesne, 1997, pp. 201-220. Jean-Christophe Goddard, "Bergson: une lecture néoplatonicienne de Fichte," *Les études philosophiques*, 4, 2001, pp. 465-477.

- (4) 一八九八年当時、高等師範学校の教員であったベルクソンは、教授資格試験の課題図書に選ばれた「人間の使命」の解説を試験準備クラスで施した。本講義録は、この講義に出席した学生のノートをもとに編集されている。ただしベルクソンは、フィヒテの哲学史上の位置を概説しつつ、また他の諸著作も参照して知識学の全体像を示しながら、講義を進めていく。

- (5) Cf. Johann Gottlieb Fiches *sämtliche Werke I* (1845), Walter de Gruyter, 1965, S. 475-477.
- (6) Cf. Johann Gottlieb Fiches *sämtliche Werke II* (1845), Walter de Gruyter, 1965, S. 338, 343-344.
- (7) Cf. *ibid.*, S. 344-345.
- (8) 「フィヒテは思考を濃縮状態へと変え、これを膨張させて「現実にする」と述べる『創造的進化』の一節は(E. 656)「この解釈を踏まえてみるとみられる」。
- (9) Cf. Johann Gottlieb Fiches *sämtliche Werke I*, op. cit., S. 515-516.

(10) 「創造的進化」によれば、カントにおいてすでに、「自然」を前に「統一機能」を働かす「人間の悟性」は「我々の個人的意識」を超える「非人称的」な性格を帯び、「神的」になる傾きさえ有していたが、「そのことはフィヒテと共に気づかれた」(B. 796-797)。この一節は、フィヒテが、カント的な純粹統覚に想を得た純粹自我から、ついには神にまで遡ったとする、ここでの解釈と相通じる。

(11) このほか、バルクソンがプロティノスにまとまつた言及をなすものに、一八九八—一八九九年に高等師範学校で行なわれた講義の記録「プロティノス講義」がある(『Cours sur Plotin』, Cours IV, Henri Hude (ed.), P. U. F., 2000, pp. 17-78)。学生のノートをもとに編集されたこの講義録も、「フィヒテ講義」との年代の近さを考慮すれば、一考の価値がある。しかし、ここでは紙幅の都合上、バルクソンのプロティノス解釈が簡潔に示され、またプロティノスに対する自身のスタンスも明瞭に読みとれる「人格」について「のみを俎上にあげる。

(12) 「カント的相対主義から逃れ」ようとした「カントの直接の後継者たち」の議論のうちで、「持続は「真」に役割を果たしているだろうか」と問いかける「創造的進化」の一節も(B. 800-801)、この点を踏まえたとき、しかるべく理解される。

(13) 実際、彼は処女作『意識に直接与えられたものについての試論』(一八八九年)以来、一貫して、持続の観点に訴えつつ自由な自我の認識可能性を回復しようとしてきたし、また、やがて最後の主著『道徳と宗教の二源泉』(一九三二年)において、やはり持続の観点から神の問題に取り組むことになる。

(14) バルクソンのこうしたフィヒテ観を、フィヒテの側の視座から批判的に検討しなほす余地はあろう。しかし、その点から本稿の目的を超える。  
本稿は、二〇〇六年十一月二十五日開催の日本シェリング協会第一五回年次大会(於京都産業大学)における口頭発表に基づく。

(むらかみ りゅう・東京大学)